

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十七年三月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三九二号）

次

お慈悲を遁げ廻る根性……………	近角常観……………	(1)
老のかがやき……………	井上善右エ門……………	(4)
凡骨日誌抄……………	西元宗助……………	(7)
一道会の記……………	榊原徳草……………	(10)
榊原さんの「一道」を読んで……………	川畑愛義……………	(13)
念仏詩抄……………	木村無相……………	(14)
法悦その折りく……………	花田正夫……………	(17)

目

慈光

第三十四卷 第三号

お慈悲を遁げ廻る根性

近 角 常 観

こは御同様人生上の「すむ、すまぬ」「仕度い、出来ぬ」を何時までやって居ても、何時までたつても切れるということとは無い。故に「切れ」とは一つも仰しやらぬ。否切れぬ為には何時までも人に不足の念が去らず困っている。その哀れな心底までお取上げ下されて、―それも今俄に初まったのではない。

三恒河沙の諸仏の、出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども 自力かなわで流転せり。

昔から今日迄その思いの止まないとき、その出来ない点をば疾うの昔から御覧下されて、その止まず出来ぬところをば哀れと見て下さる超絶のお慈悲でましますのである。

故に御同様ここを頂かねばならぬ。

さてそういうと皆様は「そう云うて下さるけれども喜べぬ」と仰言る。喜べと誰が云ったかと云わねばならぬ。否反対に「汝は喜べぬだろう、頂けぬだろう、善くなれぬで苦しいだろう、逆境に落ち残念だろう、善くなれぬで苦し

ぬ身の上じや故それが哀れで見捨てられぬと云うて下さる御真実であると申しているのである。で茲になると仏の御力は一切無碍で、此方が困る所行き当る所を其処じやくと其点其点を遣る瀬なく思召し、お照らし下さる広大のお慈悲でましますのである。爾るに私共の方は然うは云われるれば言わるる程、自分で後に手を廻わし「斯う迄言つて下さるのだから少し喜べそうなもの」と斯う云うてゐるがはや仏に対し五分五分で向つてゐるものなのである。

信仰を得んならんと思ふ誤り

其れ故真実お慈悲が徹して下さる一念には、私共の方にこのお慈悲を頂いて何う、という目的などあることはない。殊に他力を聞き慣れてお出での人に有りうちな間違ひは、信仰を得んならん、皆が信仰を問題にしておられる事である。頂かんならん頂かんならんと思つておられるから何時までも頂けぬ。「今日は頂けそうなものだが」と頂くことを眼目にして居らるる。そんなにして何の為に頂かんならんのか。信仰を恰も自分の名譽の如く、又何人がありて頂け頂けと云うてるものの如く思つておられるのが間違である。

こは親鸞聖人でも

詮ずるところ愚心が信心におきてはかくの如し。このうえは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面

いだろう、―とその苦しいよくなれぬ所を大慈悲より御覧下されて、その者を御見捨てなき遣る瀬なき思召が仏の御本願であると申しているのである。

すると皆様は又ここで得手に持ちかえて「それではよこべえでもよいのじや、浅間してもよいのじや」と聞かれるから分らぬ。今御同様が其の仕てならぬ悪がやまず、苦しみ悶え、涙を注いでいる。「其のよくなき事をして居る様が可哀そうで、如何にも汝は苦しいだろう」とある思いがけなき御真実であると申しているのである。すると又前に戻つて「そう聞いたら有難くなるだろう」―とそんな先廻りをし、横の方にそれて仕まうから肝腎の思召の方が頂けぬのである。

自分が食べられぬから、人が親切に云うてて下さるに、受けることをせぬで、自分が受けられる、受けられぬの勘定を仕て居るものが何処にあるかと云わなくてはならぬ。今仏の大悲は我々がその頂けぬ、業報に閉ざされて出られ

々の御はからいな

と仰せられてあつて、面々の自由であると仰せられてある。夫に銘々の方で勝手に「頂かんならん」という頭をこしらえ「頂く為には聞かぬならぬ、聞くには本気でなければならぬ」など自分で自分の積み累ねをやっている。それだから皆が何時迄たつても頂けぬ。無駄骨折して頂けぬ、聞き慣れに落ちるとなつてくるのである。即ちこれが何か、自力の菩提心である。それ故法然上人は弥陀の本願には自力の菩提心はないと知らせて下された。其の意味は我々の方で「どうせんならん、こうせんならん」乃至「信仰を得んならん、喜ばんならん」と何程思つたところが如何にしても頂かねば喜べぬ。其の如何にしても頂けぬ者故に、夫が可哀想で見放さぬとある大悲が、弥陀の本願でないかとお知らせ下さるのである。それ故私共の方でせぬならんこととは信仰上には一つも無い。

殊にこの夏の伝道に於いては、この得んならんくと云うてる人が非常に多かつた。一には云わぬも或る青年の如きは、多年この得んならんくと自分で信仰を作り上げ、それで自ら安んじて居られる人があつた。それ故一言それが作り物だと知らされると、今迄多年やって来たのが何やつていたのかも仕様がな。処が今仏のお慈悲は其の仕ようなき、その者をお見捨てなき思召ときくなり、目がさ

めた如く初めて御安心下されたのである。

で、この方にしてはそれ迄多年やって来た事が、一つとして間にあうなら、法然上人が四十三才の時、今迄のを抛げ捨てたと仰しやっただのは虚言になる。又親鸞聖人は二十九の時迄苦しめたから頂けたとなり、近角は苦しんだから信仰に入れたとなる。何ぞ知らん、今迄のはお慈悲に反した馬廉骨折、持前の迷情の為詮方なくも入らざる苦勞をやっておったのである。しかるに今思いがけなく其の仕方なき様を哀れみて、横合より飛んで出て、其の者を捨てぬと遣る瀬なく云うて下さる仏のお慈悲が実に超絶の御本願。斯る仰せが既に超絶の大悲である故、之を頂いた時には我々も其の御親切一つで人生の苦を超絶出来るとなるのであります。

処が茲に気をつけなければならないのは、世に所謂超絶主義なるものがある。之になりてはならぬのである。世に所謂超然主義は、人生と無交渉に、超然としてある超然主義である。この事に取って貰うてはならぬ。仏の超絶は然うではなくして、反対に総ての者が恐れ呆れ、遁げ去る所の私共の悩み苦しみに、仏の方より哀れみ、近づき、しがみついて下さる処の超絶である。この点より云うと、寧ろ在来の宗教は人生に超絶しすぎている。言いかえると、此の他力の教にしては、今迄の説き方が余り人生問題に超然仕過ぎていた。

老のかがやき

最近、私の心を強くうつ二つの言葉があります。その第一は次のようです。

「肉体は老いゆけども、正法は老ゆることなし」(南伝「相應部」)

この言葉に老の上が思われると共に、不思議に勇気づけられるのです。この肉体は日々老いてゆきます。七十を越えると、それがあり／＼と感じられます。からだのあちこちに故障が起こる。これが老衰現象というものでしょう。釈尊が阿含の遊行経に「我身は歳八十にして故車(古る車)の修治して漸く至るが如し」と申されている如く、年といふものは厳肅なものです。老いて不自由を味わわぬ人はありません。

もし我々が肉体だけの存在であったなら、老は決定的に悲しくあわれなものです。しかもなほ人間には自我の執というものがあつて、過去の自分を現在に引寄せ、自分を値打あるものに位置づけようとする。自分の若い時はこう

然うではなくして、私共が日々人に不足の念を抱き、或は悲しみ恨み、現に色々思っている人中——誰あつて一人汲みとつて相談にのつて呉る者なきこの心中に對し、その為に向う様より態々進んで出て「如何にも汝は苦しいであろう、無理もない、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、衆べて水火の二河に墮せんことを畏れざれ、其の苦も悩みも我が悉く知り盡くして捨てぬ心故、憂うるには及ばぬぞ」とすけすけに云うて下さる大悲の呼声が、仏の本願であるのである。それ故私共この広大の大悲に接するもの故「ああ今日迄、何うにかなる事と思つて人相手に愚図々々言うていたが、申訳なき間違にてあつた。人に彼是注文してた自分の方が実に悪うございました」とここに方角が一転して今迄の彼是れを断ち切る事が出来るが、之が人生を超絶させて頂く処の味わいであるのである。

求道第十一卷七号より



井上善右衛門

であつたが、今の若い者は駄目だという。虚しい權威に對する抵抗は必至でありましょう。こんなところから葛藤が起るとしたら、老はいよ／＼みじめであります。こゝに老醜という恐ろしい言葉が現われてくるのではありませんか。私どもも仏の正法に遇うていなければ、この老醜の軌道をまっしぐらであります。否、聞法の縁をえていても、いつしかこの老醜のとりこになつてゐることがあります。思えば空恐しいことです。

そのとき「肉体は老いゆけども、正法は老ゆることなし」という言葉に触れますと、ハッと胸うたれるのです。肉体は老いに鎖される外ないものですが、この肉体に恵まれた聞信の心は鎖されてはおりません。それは不滅の正法に通うているのです。正法とは仏心です。仏心とは無量寿の南無阿彌陀仏です。そこに老いはありません。肉体と共なる心が衰退すればするほど、仏心の眞実は輝きを放つて、この私の有漏の穢身を撰取不捨の中に照護して長養して下さ

つています。それを思えば勇躍せざるをえません。

釈尊が八十の老軀を以て法の旅をつづけておられたとき、阿難よ背が痛む、しばし木蔭に臥したいともうされ、草のしとねに横たわれ、阿難に法を語って聞かせてくれと申されました。阿難が謹んで釈尊から承った七覺支について語り、精進覺にいたったとき、釈尊は阿難に「汝は今、精進覺を語ってくれたな」と三たび問われ、「はい」と阿難が三たびお答えすると、善いかな、私はこうして臥してはおられないと起き上り、再び旅を続けられたということです。老ゆることなき法の真実に、老いの身を忘れられた釈尊のお姿を偲ぶと目頭が熱くなるのを覚えるのです。

己れを見ているかぎり老は悲しいものでありますが、転じて法を仰ぐかぎり老は光と共にあります。生の依るところの死の帰するところ、それが不老不滅の正法なのです。この正法をたまわつてある身の幸をよるこばねばなりません。しかしかく言えばとて、この私が日々老を忘れて生々と生きていくのではないのです。老の山路に行暮れんとしては、正法に呼び戻されているのが現実です。そしてきてきて正法は捉えて放ちたまわぬものと、嘆じつつ老ゆる肉体と共に法の真実を仰ぎまいらせているのです。

第二の言葉というのは、

「老いゆけよ、われと共に、最善はこれからだ」という一

し老年が本当の原因なら、私とでも同じ經驗を味わうはずだが、実はそうではない。愛欲の樂しみが奪われたのではなく、それから逃れ去りえたことを無上の欲びとしている。たとえてみれば、狂暴で猛々しい一人の暴君の手から、やつと逃れおせたようなものだ。老年になると、そうした種々の情念から解放されて、平和と自由がたっぷり与えられることになる。身内のものが虐待すると訴える人もあるが、その原因はたゞ一つ、老年ではなくその人の性格だよ、端正で自足することを人間であれば、老年はさほど苦になるものではない。もし逆であれば、そういう人は老年であるのが青春であろうが、いづれにしてもつらいものだ」(取意)と語らせています。

老いと共に情念から解放された自由な天地を讚美する精神は気高いものでありますが、それは同時に厳しい高貴な精神を要求しています。そこに真実の理想があることは窺い知れますが、容易にその峰に登りえて安らいうるかどくかは、この私にとって疑問です。けれどもまたその境地に我々も決して無縁ではありません。

それはたゞ本願の真実に身を委ねることです。赫々と輝く本願に照らされて、老いて知る人生の諦観が開かれ、精神の安泰が恵まれます。そして肉体の老衰の極、その消滅と同時に涅槃の妙境界が与えられます。蓮師が、「こゝ

句であります。

これは西洋の人の言葉ですが、私には感銘深いと共に、そこに訴えられている厳しさに頭の下るのを覚えるのです。

先ず「老いゆけよ、われと共に」というところには、老いを回避しようとするいささかの思いも感じられませんが、むしろ進んで老いを迎えようとする心が感じられます。そしてその老いに希望の輝きをみているようであります。一体どうしてそのような心が開かれてくるのでしょうか。そこには老いて始めて味わえる境地を待望していると感じられるのです。これについて思い出されるのはプラトンの「國家」篇の中で、ソクラテスとケパロスとの対話として語られているところです。

ケパロスという高齢の老人にソクラテスが「あなたは我々がやがて通らなければならぬ老の道を先きに通られた方なのだから、その道が平坦か険しい道なのか伺っておきたいのです」と問う。ケパロスが答えて「何人か老人が一緒に集ることがあると、そういう場合、大部分の者は悲歎にくれ、若い頃の愛欲の快樂がいまはなくなつたことを歎き、何か重大なものが、奪い去られたかのような愚痴をこぼして、老年がどれほど不幸の原因になっているかをめんどくと訴える。しかしどうも私にはその人達は本当の原因でないものを原因だと考えているように思えてならない。も

にてありがたやたふとやと思ふは物の数にてもなきなり、彼の土へ生じての歡喜は言の葉もあるべからず」と仰せられた第一義諦妙境界相の浄土の顯現、それはまさに「最善はこれからだ」という言葉に合致しましょう。

そう思うと、老いは衰退への道ではなく、輝きへの道であります。念仏者は老いのかゞやきを味わわせていただく幸せ者であります。

おりにふれて 北岡 行男

埋火を搔けば憶念蘇り

鉄塊の温められし炭火かな

冬灯下遠き縁を慶びて

この日頃本願ほこり冬籠る

冬籠り悪性さらに止むべしや

もろくの障り解ぐれて日脚伸ぶ

凡骨日誌抄 (10)

——生命あるしるし——

西元 宗助

さる二月八日(月)届いた『慈光』誌を推したたく。もう二月号は、とてもご無理かと思っておりました。

まず、花田先生の「あとがき」を読む。その中に、「慈光も」三十四巻になりましたが、私の命のあるしるしに御手許までおとけいたします。三十(余)年も続けさせていただと、「慈光」が、私の身体の一部になって、月々の発行を私の呼吸と同じように感じております、と。一読胸つまる思いがする。

そういえば、この二月号は、玉文「法味その折り／＼」をはじめ、ことごとくが先生の息吹、前念命終、後念即生でないものはない。紙面の余白の、中村元氏の「釈尊の最後のご説法」をはじめ、種田山頭火の「行き行きて倒れるまで」の詩も、それから吉野秀雄の絶唱「わが命やがて尽きなむ さりながら ゆるがせにせじよ その消ゆる日までも」も、妙忠尼の「臨終の語」も、殊に巻頭の命師、池山栄吉先生の「ただ念仏して」など、ことごとくが先生の

々(略)

右手右腕の間節のはれて痛みのひどい奥さまが、ペンをとられるのは、よほどの思いでおありであろう。じじつ御奥さまから直筆のおたよりをいただくのは十数年振りではないか、このおハガキをいただいて、わたしは心に泣いた読みかえして涙がいっぱいになった。顧みれば、あや夫人とのご縁も深い。最初に存じあげたのは、今の京都女子大学、当時の東山の女専の麗わしい内気な女学生でおありであった。そして花田先生は、京都大学の仏教学の学生で、わたしはその大学に入学したばかりであった。

以上と前後して、手術のために入院なさる前日の川畑愛義先輩(京都大学名誉教授)から電話がかかる。「花田先生のこと、名古屋大学附属病院の泌尿器科の近藤博士のご自宅に電話して、くれぐれも宜しく頼むとお願いしておいたと、それから御病状は高齢ゆえ、決して樂觀は許されないが、余病さえ出なければ案じるほどでもない、ともかく最善をつくす」とのことであったと。多少はホッとす。

それから、岐阜の國広真量氏からの嬉しい電話は、私も名古屋附近の有志のもの、集りまして、心配のあまり色々話しいました。すこしでもお役に立つことはないかと

遺教ではないか。いよいよのときが、近づいてきたかと、心落ちつかぬ日、花田あや子夫人のおハガキが届く、その御文面は、

この度はわざわざ病院にお見舞い下さいまして有りがとう存じました。又大谷様の誌代わざわざお送り下さいましてありがとうございます。

お見舞いくださって余命いくばくもない様に思し召しましたことと存じます。ただその中で慈光誌三号を出した思いに燃えて居りますのを見ますと、何とかして命ある間に三号を出したいと存じます。そして三月まで命のあるようにと念じて居ります。それで御無理な勝手なお願ひでございますが三号の玉稿をお恵みたまわりたく、彼へのはなむけに何卒よろしく願ひ申し上げます。この様に申しましても身内のひいき目でございますが、か、又もとの体になるかと思ひ念じつづけて居ります云

その結果、本日慈光社に参上して、奥さまにお目にかかり、せめて「慈光」誌の發送その他の雑務、ぜひお手伝いさせていただきますたい旨、申しあげた処、喜んでいただけ、さっそく私どもの仲間の吉田さんを中心に、その手配をすることになりました。それでその旨、わたし以上に御心配の榊原徳草師ご夫妻に、さっそく報告したりする。

昨秋十一月、花田先生を病院にお訪ねしたときは、先生はまだまだお元気で、その折には、四日市の渡辺了恵住職の「願土」という書物(非売品)をお貸しくいただきました。この中のいくつかの詩は、昨年、時折、本誌に紹介されたことがあります。ご記憶のかたもおありでしょう。その中の一つ、二つを、左に掲げさせていただきます。

伝道板

恵まれすぎて
慶び知らず
わが命さえ
借りもの

ぼさつま

ぼさつま
身をへらし
まわりを
あかるく
してこざる

この「ぼさつま」の詩をよんでいると、いま病床にお
ありの花田さん、いや花田先生のことを想われてならぬ。
それにしても慚愧／＼。

この慈光誌、四号も五号もと、願い念じながら、
南無阿弥陀仏

病床の詩

村山 暮鳥

よく／＼みると
その瞳の中には
金の小さな阿弥陀様が
ちらちらうつっているようだ
玲子よ
千草よ
とうちゃんと呼んでくれるか
自分は恥じる

おなじく

ああ、もったいなし
もったいなし
けさもまた粥をいただき
朝顔の花をながめる

妻よ

生きながらえねばならぬことを
自分のはつきりとおもう

一道会の記

昭和五十六年十月二十五日午後一時、池山栄吉先生の第
四十四回の追憶会である一道会を開催しました。毎年全
各地からの参会者で書院の座敷は一杯であります。毎年私
の孫が玄関の履きものを数えては私に知らせてくれたので
すが、今年は大きくなったのか数えてくれません。然し座
敷は毎年のように一杯で約百人は御参集と思われました。
仏前に阿弥陀経を誦誦、皆様も一斉に助音して下さって朗
々たる読経の音が室に溢れます。終って先師の御写真に向
い例年の如く歎異鈔を拝読します。毎年拝読の時に序文の
中の「幸に有縁の知識に依らずんば…」の所で、胸が込み
上げて声がつまるので、今年は声を大にして読み通しまし
た。

今年には川畑先生も西元先生も他の法縁が重なって御欠席
となり、講師は花田先生一人となり淋しいことであり、そ
の穴埋めに私は少し開会の挨拶を長く述べました。その録
音を記します。

榊原徳草

ひかり

私等の心の中には先生は現に生きて居られますが、今回
は先生御往生の後、四十四回目の追憶の一道会であります。
私も八十一才となり、時の過ぎるのは早いもので感無量で
あります。さて北陸の法友、長谷顕性兄から「四海常に照
らせども悩みの雲深くして」と電報が来て欠席を謝して下
さいました。それから先生の「絶対他力と体験」の御著書
を拝読してみますと、その中で皆様に御案内したい所があ
りますので朗読致します。「哀れなる哉、恩顔は寂滅の煙
りと化し給うと雖も、真影を顔前に止め給う、悲しい哉、
德音は無常の風に隔たると雖も美語を耳の底に残す、七百
年の星霜を隔て乍ら、親鸞法然両聖人と一座して心絃の諧
調を感じるの、一に如来から賜った同じ信心のお蔭だ、
先きに生ぜん者は後を導き、後に生ぜん者は先きを訪い、
相携さえて同じ光りを仰ぎ同じ泉に杓み、同じ樹蔭にいこ
い同じ道を辿る、その唯一の合言葉は同じ念仏の外にない、
恋しくば南無阿弥陀仏と称うべし、我も六字の内にこそ

住め、俱会一処、今生夢のうちの契りをしるべとして来世
覚りの前の縁を結ばんと成り、我れ遅れなば人に伴なわれ
我れ先だたば人を導かん、亡き妻が不治の病いにかかっ
てそれと知れたとき、悲歎の中から、嬉しき身に餘るを
覚えたのは、この御文であつた、樂しき初め思ふごと、悲
しき終り耐え難し、やがて幽瞑境を隔ても、心と心が永
久に結びつけられて浄土の対面を期することが出来るから
であつた。同一に念仏して別の道なきが故に、遠く通ずる
に四海の内皆兄弟なり、世々生々の父母兄弟なる一切有情
は、一心帰命の一念に同じ御親の愛子として、永久変らぬ
心の上の兄弟となり、会者定離の理法を脱して、俱会一処
の絶対界に、此世からの志願を実現することが出来る、父
母兄弟朋友たる間に現当二世の結縁は、独来独居の淋しさ
も自ら薄らいで有漏の穢身をそのまゝに、俱に浄土に住み
遊ぶ面影さえしのばれよう。「安樂仏国に至るには、無上
宝珠の名号と、眞信心一つにて、無別道故と説き給ふ」
還相廻向について「お前に御信心が頂けなければ、親子と
云つても此の世だけのこと、彼の世で一緒になることはで
きない、だから是非御信心を頂いて御浄土に参られるよう
にしなければならぬ、私は参るにきまつているのだから。
然しどうしても頂けなければそれでもよい、私が仏とな
つたら、衆生済度に出て、よしお前がどこにどうして居よ

をお守りさんにたのみ、この寺に居りましたが、或る時そ
の子が新聞を見ていて、心中つてどういふことと聞きます、
それで私は、お前にはまだ判らない、十七八才になれば
わかる、と答えたことです、自分と同等かそれ以下のこと
しか判らんです。も一つ、奈良の猿沢の池の畔の宿屋に
一人の旅人が泊りに来て二階へ上る、そして手を拍いて呼
ぶ、下女はハイと返事し乍ら二階へ登りつつ、早く風呂へ
か又は御飯かと思ひつつ上つてゆく。池の鯉は魅をくれる
のだなと思つて宿と近くの方へ遊ぶ、鹿はせんべいをくれ
るのだなと集つてくる。各々に自己中心にしか聞けず判断
できない。例えば空の十五夜の満月を仰げば丸々そのまま
仰げる、然しこれを心に浮べるだけだと心の波の上で千々
に砕けて「千江水有り千個の月」です。これは私の考へで
はなく、実は法蔵菩薩の「願」です。法蔵菩薩が願を建て
ようとしたとき、自分の願いは自分と同等かそれ以下でし
か願われないので、どうしたらよいのかと世自在王仏に尋
ねると、自分のことは自分で考えよという、どうしても自
分以下のことしか願われないと答えると、世自在王仏は二
百一十億の諸仏の浄土を見せて下さつてその浄土を建立す
る手段なども教えられた。それをもつて四十八願を建立
し成就して南無阿弥陀仏になられた。これが私の話の根拠
になるのであります。ですから、私共が私以上の仏の教え

うとも、一番にお前を救ひとつてあげよう。亡き母が私の
子供の時分、よくこう言われたのだが、未だに耳の底に残
っている。私はどれだけこの言葉に引きつけられたかわか
らない、まだ信心がぐらついて如来様が陰顯出沒してい
た頃、大分信的傾向から遠退いた矢先き、この言葉を思い出
しては、俄に後戻りをしなくてはならなかった。今更思
えば亡き母は、如来の使いとして私に仕向けせしめ且つは
還相廻向の未通りたる大慈悲心をもつて、一生尽して下さ
つたのであつた。「往相廻向の大慈より、還相廻向の大慈
を得、如来の廻向なかりせば、浄土の菩提をいかせん」
—これが池山先生のお母さんからの有難いお心でございま
す。こうゆうお母さんが有られた、そして池山先生が居ら
れるのであります。決して不思議なことではないようであ
りまして、この母があつてこの子があつた、本当に還相廻
向しておつて下さるといふ、こういう事実でございませう。
話してなく事実を申し上げたのであります。

今日は花田先生御一人なので私も一寸お話させて頂き
ます。こういうことです、私という者は私と同等か又はそ
れ以下のことしか解ることも考えることもできない。今、
目の届く所といへば天井の表面迄です、天井の裏迄は届か
ず解らない。私以上のものは私には解らない。私の長男、
今五十才になりますが赤ん坊の時に親類の十一才の女の子

を聞くには、私の計らひを雑えず「仰せを蒙る」蒙るとは
着ることです。穢ない私の身体のまま、仰せを着させて
頂く。「好き人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきな
り」と聖人の御言葉であります。

教行信証の総序に聖人は左のように仰せられておられま
す。

「穢を捨て浄をねがい、行に迷い信に惑い、心くらく識
りすくなく、悪重く障り多きもの特に如来の発遣を仰ぎ、
必ず最勝の直道に帰して、専ら斯の行に奉え、唯この信を
崇めよ」「奉」はまた受ける、とも読みます。だから、私が
自分の計らいで念仏するのでなく、私の為に成就して下さ
つた御救いの名号を「うけ」それに「仕える」のが称名念
仏であり、御信心も崇め尊とんで頂くのであります。



榊原さんの「一道」を読んで

川 畑 愛 義

先ほど畏友であり、法兄でもある榊原徳草さんが本を書かれたと聞いた。もちろん信仰に関するものである。この話を聞いて、私はその本屋さんはいい事をしてくれたとまず発行書店に敬意を表した。というのは宗教の本などなかなか売れないし、まして無名(?)これは大変失礼、有名にしてもそれほどではない徳草さんの信仰本を出してくれた英邁な本屋さんにお礼が云いたかった。

ところで出来栄はいかに?うやうやしく一礼して拝読するに、まさに予期以上の傑作といわなければならぬ。と云へば何か私がひとかど評論家めいて聞えるが、そうではなくて、徳草さんに対しては心の中ではつねに非常な尊敬の念をもっているのに、会ってしまえばつい悪口か、冗談か、へらず口しかたたかない。そういう二人の仲なのである。二人の仲といえど対等のつき合いのように、聞こえるがいつも迷惑をかけているのは私の方なのだが、徳草さんはこのごろようやく私の非礼に対してもあきらめの心境に到ったようである。

ところで、本論に入って、この本はすべて徳草和尚の体験の記であり、入信の告白の言葉でもある。たんたんたる事実の描写ながら却ってモノクロのファイルのすがすがしさの中に底光りのする滋味さがただよっている。

「一道」となった池山栄吉先生に心粹し、傾頭した信の歩みは何とも貴重な信仰への指針書であるとともに、最奥の秘伝ともなるであろう。

しかも浄土信宗の本流にどっぷりつかりながら、私本 薫習は争えないもので禅的な光風がひらめいて筆致の鋭い冴えもひらめく。

一道会が池山師のなきあと数年、自然発生的に彼の住寺たる常住寺を本拠として発展し、発生し、成熟しつつあるのも彼の人間、そして信仰の願力によるところが大である。彼のようなお人柄は、現代社会ではめつたに求めても、探しても見当らないだろう。その高著が生々しい香気をたたえて世に出された。一人でも多くの求道者によって読まれることを期待したい。

念 仏 詩 抄

信じようとせず

香師おおせに
常ニウタガワヌ人にも
金を貸す時は
ウタガイがおこる
これは大事なことゆえじゃー”

まして後生の一大事
後生も後生
たつた今の後生の一大事
ウタガワズにはいられない
信じようとせず
いっそ

ウタガエルだけウタガツテ
みては

木 村 無 相

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

さてさて

香師おおせに
業にひかるれば
悪道なり
御教化にひかるれば
浄土なり”

御教化のギリギリ
今のナムアマミダブツ
ナムアマミダブツは

お浄土の声ー
「二道」を讀ん

目ざめよー
目ざめよー
如來

さてきて
お浄土へか
悪道へか

今
ひとえに我を
案じたまう

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

香師おおせに
" たった今
わが身が悪道におつることが
知れたら

今
香師おおせに
" 死ぬるは
今何年あろうとも
地獄はいつも
足の下なりー

夢のところで居ろうハズは
ないー

地獄一定ー
たった今が

いや
いや
いや

念山精姓

死ぬるも今
地獄も今

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

ああ我がココロよ

香師おおせに

" かく参る身となりて
わが往生のあきらめの
出来ぬほど残念は
なきほどにー

カラダは
参りても
ココロは

参らぬ
往生にあきらめの
出来ぬハズー

もったいなし

もったいなし
もったいなし

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

田五夫

法悦その折りく

花 田 正 夫

涅槃会に憶うこと

釈尊は八十歳、度すべきものはすべて度し、未来に縁を結ぶべきものには法をのこされて、御病身を、ニレン禪河のかたほとり、サラソウ樹の下に、頭北面西右脇のお姿でしずかに涅槃に入られたのである。

さて頭北とは、南は暖かく北は寒い道理で、頭寒足熱の自然な姿である。また右脇とは、体力が衰えた時、心臓を圧迫せぬように右脇を下にせられている。次に面西とは頭を北にし、右脇を下にして寝ると自然に顔は西に向つて来るが、すべて東は日の出る方向で、ものの生成されることを意味し、西は日も月も星もすべて西に沈み、そこに西の空はものみなを帰して行く方向を意味し、東の始めに対し、西の終りを指す。八十年の御生涯を完うされた釈尊が、静かに莊嚴された西の国へ帰られるお姿をあらわされたものである。日本の浄土教の祖師法然聖人の御臨終は釈尊と同様に八十であった。そして称名裡に沢山の仏菩薩が来迎し

ていられると弟子方に告げられて、男女貴賤の別なく、多くの人々にとりかこまれて往生せられた。その時、西の空に紫雲がたなびいていたと伝へられる。誠に御立派な往生であった。

これにくらべ九十歳で往生された親鸞聖人の御臨終には僅か四五輩の人々、その中には覚信尼はもとより尋有、兼有の御弟様、その他は極く少数の人々に見まもられて、念仏の息が絶えられたのである。御息女の覚信尼は、法然聖人の往生とちがって、極く平凡な御往生について、お母君の恵信尼公に不審を立てておたずねしていただけることも、恵信尼文書に出ている。

さて私は、法然聖人の御往生は御立派であったことを尊いことと思うが、親鸞聖人の静かな平凡な御臨終をきくにつけて、私共には、往生について何のほからいもいらず、そのまま救われることを知らされて、頼もしく思う。

白木祖山先生が

と最後の病床にあって詠じられた御心境も、撰取して捨て給うことのない大悲のふとこれにあって、何のほからいも無用になられたお歌で心うたれる。

池山先生は、或秋の午后、ポツリと語られたのは
仰向けに仔犬ねころぶ日南かな

の一句を示されて、数日前、あまりに天気がよいので、椅子を庭に出して、新聞を読んでいると、今まで走り廻っていた仔犬があまり静かにしているので、足元を見ると、椅子のそばで仰向けに寝ころんでいた。思うのに、サンサンと太陽は心地よく照らし、信頼する主人がいるところから、心ゆるして仰向けにねころんでいたのである。犬は警戒心が強く、たとえ寝ても、すぐ飛び上れるような姿勢でいるのが普通であるのに、と説明せられてのち、この仔犬の姿こそ他力信心のこころである、と結ばれた。

近角先生は、突然中風でたおれられた時、御令弟の常音先生が急いで見舞されると、いかにも嬉しそうに喜んでいられるので、近よられると、お浄土の東門が開いたのだものよろこばずにいられるか、と答えられた由である。
見れば御子様方も病床に集り、信者の人々も見舞に走せ

参じていて、先生は非常に御満足であった。その時、東大の病院から来られた主治医の方が「この病気は悲観して打ち沈むのもいけないが、先生のように喜んでいられても絶対安静を守らねばならぬ患者さんにはこまったことです」と常音先生に話された。それからは病室に看護婦と医師だけ残して、家族をはじめ誰も入らなかつた。こうして数日たつと、早速、常音を呼べと云われた。常音先生が病床にはいられると「常音、こうしているといのちはとりとめ得るのか」と尋ねられた。そしてその見込みありと知られてからは、すすんで安静をまもられるようになられた。

その後一年目、会館の報恩講の日、御子様にたすけられて、右手右足の御不自由なまま演壇に立たれて、開口一番「私は病のはじめ非常に満足して喜んでしたが、その心の下に、子供のためにも、信者のためにも、もっと生きたいな、という心がうごめいていた。それがそのまま歎異抄の九章の、浄土へまいるたき心のない姿であった。この身にはこれをよく理解されて、ことに憐んで下さるお慈悲一つが力であり、たのみである云々」とお話し下さった。

その後十年近く居られたが、御令弟常音先生が「兄は極く平凡な死にさまでしたが、私には何か特別な様子、家族を呼んで法話をするこどもなく平々凡々の往生が非常にあ

りがたい。若し何か変つていたら私はついて行けないからね」と仰言つた。

先年亡くなられた西本清人氏は、菅瀬芳英師に師事された篤信の方であるが、次の様な述懐であつた。
「私の母は若い頃から聞法してお念仏をよろこんでいたのですが、父は商売が忙しくて法縁にも出ず、仕事々々の生活であつた。

ところが突然父が病になり不治を知ると、たちどころに念仏を喜ぶようになり、臨終の時には家族を集めて、仏法の大切なことを遺言して立派な往生をした。それに反して母は晩年になつて頭がボケて、念仏もあまり申さず、仏法者らしいところもなしで亡くなつた。

私はこうした両親をもつて、父からは法の真実を教えられ、母からは機の真実の姿を見せてくれました。私自身、死の縁無量とてどうした死にざまをするかわからないが、母のお蔭でその心配もいらぬ身にさせて貰つた」と、しみじみ語つておられた。

かばたの源通寺の老院の歌に

宿業でたとえほけても狂つても呆れたまわぬ弥陀の本願とあるが、全く臨終まつことなく、来迎たのむ必要までにおそだて下さつたことは何よりの喜びである。

く腕を決して放さないのを見て、心打たれた事がある。そこに久遠の御親に昭護せられる者の大安心がある。そこには学問も要にあらず、善根功德の心配も無用である。

有無の見を破す

一般に死だら靈魂が肉体から離れていつまでも存在するというのを有の見、死んだら何も無くなるロソクの灯が消えたのと同じだというのが無の見といわれる。然し、これは二元対立の思想で、唯心論に対し唯物論があり、善悪、智愚、美醜等も皆それに入る。

その二元対立して、そこに固執して、互に我よしとなつてゐる妄想を越えられたのが龍樹菩薩であつた。譬えると夜の間にロソクの部屋、油灯の部屋、電気の部屋とあると、夫々に明闇があるが、一度太陽が東天にその光を放つと、夫等の光は皆奪い去られて、同じ明るさとなる。それ等を人の智愚、善悪、美醜とすれば或は我かしこし、我よしと誇つていたのが大きな光明の前に恥じ入り、反対に我愚なり、我あさましと卑屈におちていた人が、心の垢を洗われるに譬えられよう。

かつて、ハマシヨルド国連事務総長が事故死したのち、ウタントが次の総長になつた。その最初の声明に
「各国が我よしと主張しているのであれば、国際連合などは無用である、そこには力と力の抗争があるだけだ。こ

本願を信じ念仏申さば仏になる
本願を信じて念仏が流出する湯口である。又念仏の申されるのも本願の催しである。

煩惱具足の凡夫、いずれの行も及び難き身を悲憫されて永い間思惟と修業を重ねられて、選びに選ばれた眷属、凡夫の成仏のはたらきを、名号一つに成就して下さつたのである。

私は真言宗の在家に生れたが、信者の人々が「南無大師遍照金剛」と称える。又日蓮宗の方は「南無妙法蓮華經」を申される。その他「南無八幡大菩薩」とか、「南無観世音菩薩」と称える人々もあるが、名号は本願のお誓いがある。

即ち「我が名を呼べ、もしその者が成仏出来ないならば自分も仏にならない」のお誓いがある。このことは他に見られないところである。

ひとりでも行かねばならぬ旅なるを、弥陀にひかれて行くぞ嬉しき

と蓮如上人は弥陀仏の撰取不捨の御手を讃仰していられる。又「撰取不捨の故に正定聚（まさしく浄土に生れること）の定まつた仲間）に住す」とあるのも心打たれる。

我々がいのちがけでしがみついても、死を前にするとか、大問題に直面すると力がつきてしまふが、仏様にしつかり抱かれてこそ大安心である。夜行列車で疲れきつた母親が子を抱いたまま眠っているが、眠つても児を抱

ここに自分の国情としては資本主義が適しているが、それは絶対なものではない。足らぬところを共產主義国家によつて教えて貰おうという様になつて、互に話し合ひの場が出る云々」

とあつた。このことは心に深く銘じている。それはそのまま、千三百年昔に誕生された聖徳太子の十七憲法の第十條に担当する。「我必ずしも聖（ひじり）にあらず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ、是しみし悪しみすることわり誰かよく定むべけんや云々」が太子の教である。しかもその凡夫の救われる道は「篤く三宝を敬え、四生の衆婦万国の極宗なり。人甚だ悪しき者すくなし。夫れ三宝によりまつらば何をもつてか枉れるを直うせん」と、我等の盲点を指適されると共に、その者の救ひの道をお勧め下さつてゐる。

香樹院語録より

汝何事をか云う。我がとうなうる念仏というもの何処にありや。称えさせる人なくして罪惡の我が身何ぞ称うることを得ん。称えさせる人ありて称えさせ給う念仏なれば抑々その念仏は何の爲に成就して何の爲にか称えさせ給うや。心を碎きて思えば即ち是常に稱えるのが常に聞くなり

あとがき

昨年十一月以来皆様方に一方ならぬ御心配をおかけ致しておりますが、退院、入院をくりかえしながら順調に快復しておりますもの退院は長引きそうです。その中を仏様の御導きにより、そして皆様方の御はげましを頂き、病床にありながらも三号をお届けする事が出来まず事を、有りがたく感謝いたしております。

この様な進む事も退く事も出来ぬ身に、「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん！」との如来の御喚声一つを力として頂きつつ、あたえられた道を生きさせて頂いて居ります。

近角先生の御教はまことに身に沁みて私自身のこととして頂きました。

井上様の「老いのかがやき」は老醜のとることなっている自分を知らされ「肉体は老いゆけども、正法は老ゆることなし」のお言葉

に胸うたれたのであります。

西元様は御心を盡くしてお書き下され、先生方にも花田の病気の事を知らせ、慈光誌の爲の執筆の事をお願いして下さいました。

榊原様の「一道会の記」は何時もこま／＼とお認め下され、なつかしく思い出され、萩の葉の色づく御名号碑をおしたい申した事でありました。

川畑様は手術の爲御入院中をお心をこめて榊原徳草先生の御著「一道」の御推薦文をお送り下さいました。

木村様は相変わらずお悪くその中を念仏詩抄をお届け下さいました。

法味その折り／＼は病氣になります前に認めました乱雑なものであります。

そして又当地では読者の方々が呼びかけ合せて手わけをして、原稿写しをしたり発送の準備をしたりして下さりました。

こうして皆様方の御念力のたまもの下さりやかながらも三号を発刊させて頂きます。誌

上で厚く御礼を申し上げます。

容れ物がない両手で受ける（放哉）この句と全じ心境でございます

へおわび

花田あや記

講話等はお医者様の御指示により休ませて頂きますけれども一月一回の名古屋の一道会だけは開かせて頂き度いと願っております。がこれも御はからいにおまかせ申すばかりでございます。

定 価	半 年	八〇〇円（送共）
	一 年	一六〇〇円（送共）
編 集・発行人	花 田 正 夫	
電話	八二一局	七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷印刷人	坂 部 光 雄	
名古屋市南区駆上町	二ノ八八	
発行所	慈 光 社	
振替口座	名古屋	一〇四七〇番
郵便番号		四五七